



太平洋戦争と日本の平和

村の忠魂碑を大事にしたい

小山内 嘉一郎

過ぐる太平洋戦争は、連合国に対して日本の無条件降伏という、みじめな結果に終わってから足かけ五十年になった。この半世紀の間には朝鮮戦争や、東南アジアには戦争が長期間に亘ってあったけれども、日本は平和が保たれ、戦争には巻き込まれずに今日に至った。

敗戦以前の日本は、明治二十七年の日清戦争をはじめ、まるで十年刻みに戦争があったと思われる。三十七八年には日露戦争、大正年間には第一次世界大戦、昭和六七年には満川事変、十二年夏には日支事変がぼつ発、これが長引いてそのまま十六年十二月八日には米、英にも戦いを宣し、文字通り第二次世界大戦に突入したのである。日清戦争から敗戦まで戦争時代も五十年である。

この戦争時代は日本国民で、戦争と軍隊に関係のない人はなかったと思われる。子供を失ったり、親を亡くしたり、主人が戦死したり、名誉の戦死と違って、かけがいのない肉親を失っても涙も見せない、新聞などが伝えたものであった。因みにわが家を見ると、明治二十七年九月に、祖父が日清戦争に召集されたという。北滿に出征し戦争は勝ったというので、二十八年九月晴れて凱旋という帰国の途中、病に冒され、仙台の陸軍病院で九月二十七日戦病死している。二十七才で、妻と二才に

に式を終えて、正午に重大放送があると伝えられた。放送があって敗戦を知り暫くぼう然としていたが、やがて中隊長の話、われわれ将校はどんな責任を負わされるか、分からないといった。午前中快晴であったのに午后急に雨、それも豪雨となったのは自然も変だとひそひそ話をしていた。

敗戦終戦を確かめると中隊長が、暗号書や写真は一枚も残さず焼き捨てるようにと、指示された。三日間も貴重品の焼却にかけたのは誰も予想もしないことであった。それから兵器、通信機材などの嚴重な手入れをして、中国側へ渡す準備をした。当然武装解除もされるものとしたが、終戦から一週間も経ってからは、北京城門の警備に当たることになった。「戦争終わったのに何が整備だ」とみんな疑問に思った。だが、そこは敗戦国だ。一日に十人ぐらいつつ出て北京の城壁整備に就かざるを得なかった。こうしたことが四ヵ月以上も続き、二十年の暮れに復員することになった。

旧嘉瀬村の忠魂碑が建てられたのは大正九年だという。戦前は毎年のように村で招魂祭を催していた。国のために亡くなった人の慰霊のために手厚く供養されていた。日清日露戦争で亡くなった兵士は嘉瀬でも六人ありました。そのうち私の祖父勘太郎と鳴海永太郎という人は日清戦争で、亡くなっている。

私は子供の頃、よく父に同伴して県招魂祭（弘前公園内の護国神社）や郡の慰霊祭（五所川原の永福神社）に参拝した。大東亜戦争になってからの昭和十七年四月には靖国神社にも参拝している。こうして戦前の遺族が国、県などからもとても大事にされていた。子供心にも戦没者遺族であることを誇りにさえ思っていた。

なる私の父を残しての他界であったという。当時のことだから写真さえありません。

祖父の弟も日露戦争に召集され、生還している。父は大正の始めに現役で兵隊に二年間服役している。丁度第一次世界大戦の頃だが戦地には行かずに済んだという。私は大東亜戦争の末期に現役で、北支山西省の山奥に連れて征かれた。十九年一月である。入隊して三ヶ月目には大規模の西北河南作戦があり、急に二つ星の肩章をつけて駆り出された。

九月から下士官候補の特別教育が行われた。十二月には北京にある教育隊に派遣され、ここでも散散しぼられた。この教育隊ではたった三日間だが、親友の沢田繁一さん（鍛冶町の同級生）と会うことができた。安心したり、喜んだりも束の間、沢田さんは旅団通信隊、私は師団通信隊のため別れ別れになりました。前年の五月頃、作戦中に斉藤亀一さん（上昭和町の同級生）とも、ほんの瞬間的だが、会っている。双方ともただ「やー」と手を振っただけお互いに無事を祈るだけが、せいっぱいであった。

横道にそれたが、教育隊での修業は二十年十二月であるのに、急に八月十五日に卒業式を行うことになった。不思議なことであった。午前中ところが大東亜戦争の場合はどうでしょう、敗戦ということで、軍隊の戦死などというのは恥ずかしいような、肩身のせまいおもいをしたものだ。私が復員帰郷の時、酒気をおびた中年の男が列車内で盛んに「軍隊がだらしなから戦争が負けた」とわめいていた。年末で窓ガラスが何ヵ所もこわれた車間で、小さくなって乗っていた。雪の降る寒々とした村に人目をさけるように真夜中帰ってきた。

日本が外国と戦争して、勝った勝ったといつて五十年、一転して敗戦、軍隊の解散平和日本、民主日本の旗をかかげ再出発して五十年、この貴重な平和は、未来永劫に続くように祈ってやまない。戦争が終わって半世紀近い。年毎に生証人が少なくなるばかりである。

嘉瀬村からも現役で、あるいは召集されて戦地に征かれた人たちは何百人か何千人か知らないが、戦死または戦病死は百五十人もあるのです。遺族の中には村を離れた方々もある。嘉瀬遺族会（伊藤正美氏）は今も毎年八月十五日の終戦記念日に慰霊祭を行っている。百人以上あった遺族も今はほんの教える程度の遺族より参拝できなくなっている。

これまでも何人からも、戦没者の人名鑑を作りたいと提言があった。でも、いざ出すとなれば、資料集めや、資産の問題も出て来るのは当然である。結局これからの問題として時間だけは流れてしまいうりです。

耕作話

比良野 貞彦

耕作之次第

一、寒中に種籾拵置候事農業第一の心懸也。
但シ寒中に種籾拵置候連当前何の多きも無之候得共、翌年氣候に寄り時ならず悪風又ハ少々の水霜²なと有之候ても、格別の痛にも相成不申候由、農業年来試補者の申伝甚尤成事其利に的す。

一、春彼岸中日に種籾漬す事。

但シ此日種籾漬す事、前々の如く一作の生立丈夫なる心持也。勿論此日種漬(の)一定日と致候得者、農業一作尙取の時節日積迄相知申候。尤籾生の善悪又ハ苗代用水の通シ方は、其郷村場所ニ寄候故、十日も廿日も三十日もタネヒタシ置申候、一躰ハ中日にタネヒタシ、十日ほど漬おき候積台にて、十日も廿日も後れに漬申候。

一、彼岸中日に種漬て日数三十日程ニ而種池より上ヶ、夫より七八日十日程之間、手入有て苗代江蒔入ニ至り候得は、大躰中日より三十五六日四十日程ニ而種時ニ至り候。此節春土用五七日の日数に入る時節克候事。尤毎々は八十八夜過候而種時候由、是も克き道理なれとも、夫に而は時節後ニ相成申候。春農業一日の後レは、秋入に至り十日余りもおくれ申ものニ候。

但シ種ヲ池ヨリ上、日ニ俵俵ニ而干シ、夫より温湯ニ而洗らい上ヶ、床を拵置寐せ申候。其日数三四日四五日にて、籾より芽出候

その村や場所によつてちがいがあから、種漬しは十日も二十日も三十日も続けてもよい。概して言うならば、春彼岸の中日に種籾を浸漬し、三十日ほど浸漬を続ける見当で、十日も二十日もおくれ漬けることもある。

彼岸中日に種籾を浸漬して、日数三十日程で種池から上げ、それより七、八日、十日程の間管理(芽出しのため)を続け苗代へ種時になるようであれば、大体彼岸の中日から三十五、六日ないし四十日程で播種になる。この時節は春土用に入ってから五〜七日経つてからがよい。

もっとも以前には八十八夜(新暦五月二、三日頃)が過ぎてから種時した由、これでもよい道理であるけれども、それではかなり時節おくれになるのはやむをえない。

春の農作業の一日のおくれは、秋の収納時期になつて十日余りもおくれることになるものである。

ただし種籾を池より揚げ、俵のまま日に干し、それから温湯をもつて種籾を洗いあげ、これを床の上に寝かせるのである。その日数は三、

頃苗代江蒔入申候。右之通種床寐せ申候間、昼夜五度も七度も寒暖加減を試し候事、誠ニ以瘡瘡の子を取扱如く、耕人ニ依而は禁酒又は鳥類玉子拵迄用ひず取扱のも多有之候。

一、往古ハ種蒔入ルより三十三日ニ而早苗開致シ候由、近年彼岸五六日進候故にや四十日余も苗代ニ而そたて、植付に相成申候。時節ハ入梅前後四五日の頃植立申候。農家俗説にも入梅の露を受け植付候もの、由。此日積りニ而ハ半夏前に植付仕廻ふ。半夏を俗に苗捨日と申て、此日苗の根に付候籾落候由云にても、半夏後の植付ハみのりよろしからすと申候。

耕作のやり方

寒のうちに種籾を調整しておくことは、農業第一の心がけである。ただし、寒のうちに種籾を調整しておいたからといって、別段の益があるわけではない。けれどもこのような種籾で生育した稲は、翌年夏期の氣候により、不時の悪風(偏東風など)やあるいは少々水霜などがあつても、格別の被害を受けるものではない。という長年試してきた者の言い伝えは、はなはだもつともなことである。

春彼岸中日に、種籾を浸漬すること。

ただし、この日に種籾を浸漬することになつては、その年の稲作がほぼ順調に推移するだろうという気持ちがあるものである。もちろんこのひを種籾浸漬の定日とするならば、稲作の作業が順ぐりに進むものであるから、刈取りの時節や日積りまでよく判る。

もっとも種籾の生育のよしあしやあるいは苗代用水の通しかたなどは、

四日から四、五日で籾から芽を出すので、これを苗代へ蒔き入れる。

以上のように種籾を床へ寝かせておく間、昼夜を通して五度も七度も種籾の寒暖の加減を見なければならぬ。これはまさに、瘡瘡にかかつている子供を取扱うように、飲まず食わずに、昼夜を問わず、病人の面倒を見なければならぬのと同じようなものである。

昔は播種をしてから、三十三日で形式的な初田植えをしたとのこと、近年は彼岸が五、六日も進んでいるのであろうか、四十日あまりも苗代で生育してから植付けになる。時節はちょうど入梅前後四、五日の頃に植付けになることになる。

農家の俗説にも「入梅の露を受け植付候」とあるように、この日積りでいけば、田植え半夏前に終ることになる。半夏を俗に「苗捨日」といつて、この日苗の根についている籾を落とした由、これでも察しられるように、半夏過ぎてからの植付けは、稔りがよくないということである。

(1) 寒中 小寒から節分までの三十日間。新暦一月五日〜二月三日頃。(2) 水霜 露が霜になる直前の状態。(3) 春彼岸中日 春分

の日で、新暦三月二十一日頃。(4) 種池 種籾を漬ける池。(5) 春土用 春の土用は新暦四月十七、八日頃から五月の立夏の前日まで。

(6) 八十八夜はちじゅうはちや 立春から八十八日目で、新暦五月二、三日頃。(7) 入梅 梅雨の季節に入ること。新暦六月十日頃。

(8) 半夏 新暦七月二日頃。半夏生ともいう。

苗代之事

一、苗代地と申候は、何れにても上々田上田之部也。雪国の事故、春雪きへ待合せ苗代拵へ相成申さず、殊に春に至り糞壤等入申候而は、苗代浦上り苗出来兼申候。是等二付苗代ハ、前年植付相済候否拵置申候。尤苗代地有処により、春雪の厚薄或ハ用水の廻シ方自由不自由ニ而遅かつちき入、大足にてふみ込、其後よく腐候節糞壤見合せ入レ、苗生立太クそたて申候。

尤植付の頃ハ二束半苗ハ古来よりの定ニ候得共、三束苗より上ニて植候へは苗代かれ無く直に肥立候故、植付少々日延に成候ても、出かゝみ稲の催さのみ遅速なく尺ヶ出穂共に宜しく候。

苗代づくり

苗代地というのは、いずれにしても土地としては上々田か上田の部類に属するところである。雪国のことであるから、苗代ごしらえは春になつ

(1) 苗代拵へ 苗代をいつでも播種できる状態に整えておくこと。
きな下駄。木製の碎土整地用農具。刈敷きを土に施するのに用いられた。図57参照。(4) 二束半苗 手で二かかえ半ぐらいの長さになつた苗。大体五寸(一五センチ)、五葉ていどの苗。

田うちのこと

一、早春雪消より種時込ミ時節迄、田を克く干シ候而打をこシ候得は、くれかきニいたり墾クダケ候故人馬のつかれも少く、随分古田などの

田うちについて

早春に雪消えから苗代播種の時節まで、田をよく干してから耕起すれば、荒代掻にいたり土塊がよくくだけるものであるから、人馬の疲れが少ない。また小石交りの砂地の田地は、少々湿り気のあるうちに耕起し

(1) くれかき 代かきのこと。(2) 墾 土塊のこと。(3) アラクレ 荒代掻のこと。

田植の事

一、其田地により埒間遠近の植様第一農者の鍛練可有之候事。然共大方六尺巷歩江六十四株ハ古来の定法。如此なれハ大底埒間八寸斗りへだゝり申候。すべて苗多く取埒間近ク植候へハ、一番草取之頃までハ見事に候へども、稲催シ之節ハ格別劣り申事ニ候。却而秋出穀も不足に候。

さて草取に入、其年順不順又ハ寒暖之気候ニより二番より三番に至り、草の取立様次第にて四番草迄も取申事ニ候。是等ハ見合也。併簡に催シ申候得は筒イタミ申候故、二番草ニテ取不申候。尤陰年は二番草迄ニ而其後取不申候へは、稲催はか取申ものニ候。尤植付より十七八日廿日ほと二而、一番草切ニ入る節は初伏の頃ニ当る。稲のもて申候は、一番草より土用中頃迄の事ニ候。土用過候後はもて不申候。

附、もてと申は四五本六七本と植候稲、十本ノ余ニも相成申候事に候。

一、曆末伏と有之頃ニハ、稲走り穂出し候。上作の氣候釣合如此。尤初

て雪が消えるの待つてから取りかかるのではなかなかできるものではない。ことに春になってから下肥などを入れるのでは、苗代が涌きあがって苗が生育しかねるものである。

これらのことから、苗代は前年に田植えが済み次第にこしらえておくのがよい。もともと苗代地は、ところにより、雪が深いか浅いかあるいは用水の廻しかたが自由にできるか自由にできないかによって、遅速があるものである。しかしとにかく苗代ごしらえは、まず田植えがすんでからかつじきを入れて大足で踏み、その後草がよく分解してから下肥を適宜に入れて、苗を太く育てることを第一としなければならぬ。

もともと、植付けの苗は「二束半苗」というのが、昔からのきまりではあるが、三束苗より上で植付ければ、苗代かれがなくそのまま生育するものである。であるから植付けが少々日延びになつても、出穂登熟はそんなに遅速があるものではなく、稲の草丈も出穂の時期も変わりがなく、むしろよいのである。

砂地小石交りの田地ハ、少々しめりて有之候頃打立不申候而は、鍬入あさく勿論人力も増し申候。

但シ植付前村処により用水廻り方遅成候処ハ、二番打或ハ穂ニ而克クダキ申候へは、アラクレノ助に相成申候。

なければ、鍬が浅く入り人力も増すことになる。

ただし植付け前に、場所によって用水の廻りが遅くなるころでは、二番打ちをするかあるいは穂で土塊をよく砕いておけば、荒代掻が楽に運ぶものである。

伏より中伏之間十日、中伏より末伏之間十日廿日格年也。大躰初伏より三十日程ニ而、ほさき出候ニ出来候得は上作に御座候。

一、二百十日の頃ハ大躰花納りイタシ候様ナレハ宣候。二百日め二百廿日の頃を前十日後十日ト申候て、若シ此頃悪風にて有之候得は大きに稲を損しワルシ。シサイハ右十日頃ハ、稲の花又ハ出穂最中之頃に当ル。又後十日ハ上作の年ハ実入きわまり候故、大風あれハこほれ申候。稲刈立ハ秋彼岸一廻り過候而初鎌入候と申候事は、大躰上作の年ハ植付より鎌入迄日数百日程、中作下作ニ而ハ刈立も後れ、百廿日又ハ三十日程も段々刈立前後有之候事。

一、苗代江下糞用候迄ニテ、田へしもこへ用候事一切無之候。田へは草藁杯を牛馬にふませ、是らのミ田のこやしに用ひ是も夏こへ冬こやしと入合用ひ候。右多少見斗ひ用申候事こやしのきゝめ克とあしきにより候故、農業に心を入れ候百姓ハかくのことし。

一、薗地の内に猿毛田と申て有之候。是ハ二三年の内々度春打ヲコシク千候頃火を付焼申候得は、上土斗五六寸やけ灰に相成申候故、其年ハ外にこやし入れ不申候共随分草生見事に出来申候。是等之処ニ而田へ

シモコへ入れ不申候杯と申義ハ、地面若き故杯とも可申事にや。

一、ひとり田の事ハ、土やわらき打ヲコシにいたり人夫助ケも有之よろしく候へとも、用水方自由なる地面ニ而無之候而は、ひとり田には不相成候。

一、七月十六日の夜田面へ火をたき申候農家の俗説、此夜悪ク露降候由。種籾蒔込積合ハ、上シヨハ一反歩ニ付糶四五升、下所ハ七八升より老斗余迄種籾用意蒔込申事ニ候。

一、苗代拵立より種拵等迄取扱凡二十度余に及び、植付より秋入収納に相成候迄凡三十度余の取扱、此内ハ耕作小業色々の人力を尽シ、一作納り申者にて農民の粉骨何にたとへかたし。

一、春彼岸中日種漬より秋彼岸終まで日数百九十日余、此内春彼岸中日より入梅迄凡八十日余ニ而植付ニ相成申候ニ付、秋ひかん一廻り過候て初鎌入りに相成申候つもりにて、前にも有之候通り日数百五七日或ハ百十日程ニ而、蒔立ニ相成候事上作の氣候都合いたし申候。

一、新規開発田は、用水懸引古田のさわり無き様に是随一の事なるべし。扱開発にハ其地面百坪田一枚としてくる畝を立、太刀ニ而土をきり鋤ニ而打ヲコシ草先き土を下たにいたし是を又太刀にて小切ニいたし、少し水に乗せ置、是をまるを引、夫より大足ニテふみこみ、稲を植付け申候。草の根土共にくち候故こやし不入、尤地面居り不宣候故郡生いたし候場所も有之候得共、地面に寄るべし、大躰かくの如し。

一、廃田打発も土地により燈心草実生の柳等茂り候地面ハ新規開発に似たるべし。左もなき地面ハ人夫多く入り申候迄ニ而、さして生地にかはる事なし。是又克く打発シ申候得者、前にこやし入用ひすとも、作毛克出来申候事。

本以上にもなることをいう。

曆が末伏（新曆八月中旬頃）となる頃には、稲の走り穂が出る。上作の年には、氣候との釣り合いで、大体このようになるものである。もつとも初伏から中伏までの間が十日、中伏から末伏までの間が二十日であるから、大体初伏から三十日ほどで、稲の穂先が少しでも出るようであれば、上作ということになる。

二百十日（新曆九月一日頃）の頃には、大体、出穂開花が終わって登熟期になっているようならよい。立春から二百日目、二百十日の頃を、「前十日」「後十日」といって、もしもこの頃荒れ模様様の天気にならば、稲に大いに障害があつてわるい。

その理由は、前十日頃はちょうど稲の出穂開花の最中に当り、また後十日は上作の年であれば実入りがすでにきまつているから、大風が吹くと穂がこぼれるからである。

稲の刈入れについては、秋の彼岸（中日が新曆の九月二十三日頃）が一廻り（七日間カ）過ぎて初鎌入になるといふことは、大体上作の年は植付けから鎌入までの日数が百十日ほど、また中作や不作では刈取りもおくれて、百二十日あるいは百三十日とだんだん刈取りの時期がおくれるものである。

下肥は苗代に肥料として用いるが、本田へは下肥は用いない方がよい。田へは糞や草ナドを牛馬に踏ませたものを用いるのであるが、これも夏肥し冬肥しと適宜見計って用いた方がよい。農業に心を入れる百姓は、肥しの効き目がよいのとわるいのとを、よく選択するものである。

田植えのやり方

その田地によって、植付けする株と株との間の遠近つまり栽植密度の大小を決めることは、その農家にとって、まず第一に鍛練すべきことである。この植え方は大体、六尺四方つまり一歩（一坪）へ六十四株というのが、古くからの目安である。このような坪当たりの植付け株数であれば、株と株との間の距離は大体八寸となる。

総じて植付けする苗の本数を多くとり、株と株との間の距離を近くして植付けすると、一番除草の頃は稲株は見事に生育しているように見えるけれども、穂ばらみの頃ともなると格別に見劣りするようになり、しかも収穫も不足する。

さて、除草の時期になり、その年の天候の順不順、あるいは寒暖の氣候によって、二番から三番除草までに行なうのであり、さらに草の取り立てよう次第では四番除草まで行なうのである。これらはすべて、氣候の推移と草の生え具合いとの見合いで決めるとよい。

しかし穂ばらみになって除草すると、茎の中にある穂が痛むことになるので、二番除草のあとは取らない方がよい。もつとも天候不順の年は、二番除草を持つて止め草としてその後除草しなければ、穂ばらみはかえつて促進されるものである。

もつとも植付けから十七、八日、二十日ほど経って、一番除草に入る頃はすでに初伏の頃（新曆の七月中旬頃）に当る。稲が分けつを増してもてるのは、一番除草から土用中頃のことであつて、土用すぎから後はもてないものである。

〔附〕もてというのは、四、五本、六、七本と植付けした稲が、十

薗地（湿地帯）のうちに「猿毛田」というのがある。このような田は二、三年に一度春打ち起こしをして、十分乾燥した頃に火をつけて焼けば、表土が五、六寸ぐらいは焼け灰になるから、その年は別段肥料を入れなくとも、稲株は見事に出来るものである。このようなところで、田へ下肥を入れなくともよいなどというのは、このような田の地面が若いためであるということであろうか。

ひどろ田しておくことは、田の土がやわらかになり、打ちおこしのさいに人手が省けてよろしいのであるが、用水の配り方が自由になるところでなければ、ひどろ田にはならない。

七月十六日の夜、霜害を防ぐために田で火を焚くという農家の俗説があるが、この夜はあいにく霜が降りたということである。

苗代へ種籾を蒔く標準量は、上所では一反歩につき糶四、五升、又下所では七、八升から一斗余りまでとして、種籾を準備するのがよい。

苗代ごしらえから種籾の調整等まで、作業の取扱いはおよそ二十回余りに及び、また植付けから秋の収納が済むまでおよそ三十回余りの取扱いになる。このうちには耕作の個々の作業や仕事など、種々様々の人力をつくして、はじめて一作が納まるものであつて、この間における農民の粉骨はたえようもないほどのものである。

春彼岸中日（新曆三月二十一日頃）の種籾の浸漬から秋彼岸の終り（新曆九月二十六日頃）まで、日数が百九十日余りである。この内、春彼岸中日から入梅（新曆六月十一日頃）まで、およそ八十日余りで植付

けになる。したがって秋彼岸から一廻りすぎて初鎌入りになるような日程で運ば、植付けてから日数百五、七日あるいは百十日ほどで、刈取りになることは上作の年の標準である。

新規の開発由は、用水懸引きの点で古田の支障にならないよう、これが第一のことといつてよい。

さて開発には、その地面百坪の田一枚として畦畔を立て、野太刀をもつて土を切り、それから鍬で耕起をする。そして草の生えている上土を下にし、これをまた太刀で小切りにし、用水を少し乗せおき、この上を「まる」を引いてください、その上大足で踏み込み、稲を植付けるのがよい。

- (1) 埒間 稲株と稲株との間の距離。
- (2) 稲催し 穂ばらみ。
- (3) 出穀 米の収量。
- (4) 筒 茎のこと。
- (5) 陰年 気候の不順の年。
- (6) 初伏 夏至後第三の庚の日。新暦の七月中旬頃。
- (7) 末伏 立秋後の初の庚の日。立秋が八月八日頃であるから、新暦八月中旬が末伏。
- (8) 走り穂 一番先に出た穂。
- (9) 中伏 夏至後第四の庚の日。新暦の七月下旬頃。
- (10) 初鎌入 刈取りのため、はじめて鎌を使うこと。
- (11) 沓地 湿地のこと。
- (12) 猿毛田 泥炭のある田、あるいは田全体が泥炭の田。
- (13) ひとり田 常に水を張っている田。

(比良野貞彦著「奥民図彙」のうち)

◎「耕作話」は「奥民図彙」の一節である。比良野貞彦は、津軽藩江戸定府の侍で、七代藩主信寧、八代信明、九代寧親の三代に仕えた。貞彦が八代藩主信明に随従して、本国津軽に帰ったのは、藩日記によ

れば天明八年(一七八八)六月であった。そして翌年寛政元年二月藩公参府にともない、再び江戸に向っている。従って本書の執筆は、貞彦が滞溜したこの期間である。

「奥民図彙」という書名は、『奥州常民の生活図録』の意と解釈できる。(日本農書全集より)

むかしの稲作あれこれ

山 中 正 津

世 の 中

津軽では、世の中が良いとか、悪いとかいう事は「稲作」を指す。

世の中と言えば通念上社会、世間の事であるが、津軽の世の中が悪いというのは、稲作が不作だという意味である。

イネの語源については、「命の根」がたまってイネになったといわれている。稲は日本人が弥生時代より主食とするそれこそ命の根源である。

「農は国の本」とは東洋に古くから伝えられている思想で、国の政治、経済の基本であるということである。

また、平安時代末期には、一、百姓 二、商人 三、侍 四、職人 五、白拍子 六、巫子 七、乞食 八、鉢叩 といわれ、農業は世の中で最も必要な職業であると認識されていた。

権力者が政治の実権を握った江戸時代でさえも「士・農・工・商」とナンバ―2に位置づけられていることは、農業は人類の生命を維持するために、権力者と云いどもこれを無視出来ないからであろう。

津軽の稲作は、弥生時代からと云われているが、最近の新聞に、八戸の遺跡から米粒が出土し、これが縄文時代のもとの報じられているところを見れば、弥生時代以前に青森県にも稲作があったのかも知れない。

耕作ばなし

津軽の昭和初期の稲作について記憶をたどって書き綴ってみたい。

この場合、草の根が土とともに分解するから肥しは使わなくてもよい。もっとも地力が均一でないため稲にむら出来る場所もあるけれども、これは土地の性質によることが多い。

廃田を打ち起こすことは、土地によっていぐさや実生の柳などが茂っている地面は、新規開発と同様のやり方でよい。そうでない地面は、人が多く要するだけで、さほど土地に変わりはない。これもまたよく打ち起こしをすれば、あえて肥料を使わなくても稲はよく出来るものである。

津軽は四月に入ってからもちこちに残雪が見られ、田圃の作業は四月中旬になって急に忙しくなる。

種籾を水に漬けるのは春彼岸の中日が目安である。種籾は俵(種俵)と云って小さく作ったもの(入れたままタナキ(種池)や小川に沈めて約半月ほど漬けておく、(現在は大きな桶などの容器に水漬けるようになった。))一反歩(十アール)当り二斗の種籾を漬ける。

三月の末からは雪の残っている苗代は雪切りをする。四月中ごろになれば、苗代の鍬打ち、代かきをし、長い竿で高低をならして水を張っておき種籾の催芽を待つ。

種籾の催芽は、堆肥盛の温度を利用する。籾が黄ばんできて、白い芽が出はじめると、風の無い朝一斉に水苗代に種蒔きをする。厚薄のないように畦畔を四方から廻り平均に蒔きつける。種蒔きをした苗代は朝晩見廻りして水の加減を見、病虫害の防除に気を配った。

苗代が終れば、田の一番打ちにかかる。馬耕で、津軽の田圃は人と馬が、区画整理のされていない小さなおきの田をぐるぐる回って耕起してゆく。花見時には二番打ちをして、一番うちのすきで大きく掘り起こした土を砕いてゆく。その頃は、桜の開化前に、八幡様の杜の田打ちざくら(こぶし)が白い花を咲かせて作業時期を教えてくれる。

田打ちの次の作業は田かきになる。五月に入れば田に水を張って先ず

「モクリ」掻きをする。この季節は水がまだ冷い。朝早く素足でゴロゴロした土塊に水が浸み渡ってゆく田の中を、馬の鼻面へ長い棒をつけて誘導して歩くサセ取りはつらい。

馬は馬鍬を引っ張って、バシヤバシヤ水しぶきを上げて歩く。馬鍬押しの作業もゴロ土がとけて泥になるまでは大変な力がある。

田かき作業も「モクリ」「アラクリ」仕上げの「代かき」と三回に亘る。代かきした田に「イビリ」を摺って田の表面を平らにし、水を張って土を落着かせる。

何日か間をおいて、今度は田植えである。田植えを「五月」という。今日は何処の家の五月だと云えば、その家の田植えのことを指す。

田植えで朝の早いのは苗取り作業である。午前三時半か四時には苗代に集る。薄暗い中で畦畔端（又は苗代近くの空地）で火を焚いて身体をあたためる。戦前は水苗代であったので、モモ引き姿（後年は徳長靴）で、ヒザまで泥に浸かり苗を取るため身体は冷えて一時間も作業をすれば苗代から上って焚火の回りに寄って温まる。また、内から温めるため酒（当時は濁酒が多かった）は欠かせない。身欠きニンシんに味噌をつけて嚙り酒の肴にする。

取った苗の溜った頃、朝五時には苗つけ（運搬役）が苗を運びにゆく。馬を利用する者、リヤカーを使うもの、また「ネズ（苗簀）」に入れた水のしたたる包みを背に背負う場合もある。農道の整備されていない田圃は、他人の田のクロ（畦畔）を渡ってゆくという不便な場所もあるのだ。竹か柴で編んだ「ネズ」には三百把ほどの苗が包まれる。水から上げたばかりの苗は重い。女・子供には出来ない力のいる作業である。女たちは、五時半には田に集って苗つけのくるのを待つ。

（ユイ）をつくる。私の家では、四戸か五戸でつくる組合コに入っていたと思う。一町二反（実質的には縄延びがあるので一町五反ほど）の田を四日間で植えるが、それも連続ではなく、苗の都合、代かきの状況から植える順番が話し合われ、最初と最後の植える日は天候など（大雨強風などは休む。）を勘案すれば十日から二週間も間を置くことになる。

五月に入れば二十日も一カ月も働きづめというので体力を維持するための食事づくりも大変である。料理人といわれ、料理を得意とする人が、ごちそうづくりに頼まれて歩く。こういう人は、五月だけでなく、祝言（結婚式）や葬式の法事などにも頼まれて歩くのである。その日の人数を考えて鮮魚の仕入れ、野菜の調達、献立表は頭の中にある。

五月にはどんなごちそうが出るのだろうか、記憶を呼び戻してみよう。先ず、あずきめし（赤飯）は五月には無くてならないものである。田の神様に供え、豊作を祈るため大事なものであり、田植え初めには親戚や隣り近所、知人にも配る。あずきめしは、もち米三升に煮た小豆を茶碗二杯ほど入れて混ぜ合わせる。塩、砂糖を入れ小豆のゆで汁でしとりを打ち蒸す。このほかにサツマイモを賽の目に切ったものを入れたり、ゴマを振りかけまぜたり、酒を入れ隠し味にしたり、いろいろ工夫され、その家の、又は料理人の特色を出すのである。

○煮豆（砂糖かけ豆）○サツマイモのねりこみ○ふきのでんぶ○干鱈とふきの煮つけ○いかすし○カレイの煮つけ○鱈の塩焼（焼魚）○刺身○長芋の三杯酢○ホウレン草のおひたし○ササゲのでんぶ○大菜の漬物○二十大根の浅漬○豆腐汁 等は一般的な、何処の家でも出されるものである。

苗取りは十時か十一時には上る。炊事担当者は、苗取りへの食事の準備から田圃へ子守りたちへ持たせてやる追加のおかず作りなど大忙しである。

その前夜水を切って置いた田に縄が張られ、運ばれてきた苗は水がいっぱいのお堰に入れて泥を更に落したのを、腰に下げた苗籠に入れて、女たちは張られた縄に沿って植えつけてゆく。

縄張り役は二人必要で、これは小学生でも出来るが、オサの大きい田の場合は、泥にまみれた縄が重くなり力を要する。縄張り役も型（押し型）が出来てからお役ご免になった。型ころがしがはじまってから植えた田は、縦、横が揃ってキレイになった。また、田の草取りの際も機械作業が楽になった。

苗取りたちは、その日に植える面積を計算して十時ごろまでには必要数の苗を取り終る。

田植時は至極体力を消耗するので、食事はバラエティにとんだ献立が用意され、日に四回か五回も喰べることになる。小学校も田植え休みが何日かあって、小学生の高学年になれば、サセ取りとか苗運びのリヤカー引き、縄張り、苗洗いや子守りなど、一家は皆働き手だった。

特にごちそう作りには力を入れ、飯炊き専門に二人か三人の女が当り、子守たちを補助に使いながら、苗代への食事、田圃への小昼、昼食とごちそう作りに忙しい。

一例を挙げれば、一日五反歩（約五〇アール）の田植えとするとしよ。植え手が六人か七人、苗取り三人、縄張り二人、苗つけ一人、差配一人一人等の人数は最少限度必要で、大田作りは更に引き続き植える田の代掻きのサセ取り、馬鍬押しの二人を加えると少くとも二十人分の食事の支度をしなければならぬのである。

これだけの人手を確保するためにはお互い労働交換するための組合コ

備から田圃へ子守りたちへ持たせてやる追加のおかず作りなど大忙しである。

田植え女たちも午後の二時か三時にはその日の分を植え終る。一度家へ帰って夕飯の五時頃までには間があるので、畑の手入れをしたり洗濯やいろいろな雑務を行なう。夕飯によばれる時には着物を着替えてごちそうを楽しむにしている子供たちを連れてお膳に座るのである。

嘉瀬地区の田植え時期は五月中旬から六月中旬までかかる。耕地整理地区が用水の関係で六月以降になるのが多い。内田が一番草（除草）を取っている時に、長く伸びすぎた苗を馬の背に、耕地整理の田植えが、始まるのである。

田植えが終れば「さなぶり」休みになる。近くの町村では金木の蒔田部落のさなぶりが一番早く、五月の末には太鼓の音が聞えてくる。夕方になれば虫送りの太鼓の練習だ。嘉瀬は六月に入ってからさなぶりに入る。

虫送りは青年団が主体で行なう。先ず古老の指導を受けながらワラで虫をつくる。大きな虫、小さな虫と何体もの虫を作る。大きい虫は古町の樋口の太木に掛けられ小さなむしは村の端々の道路端に虫除けのお札と共に置かれる。

毎年さなぶり前に虫祭り行事を取り行なう若者頭を選ぶ。嘉瀬は県道をはさんで西側を古町組、東側を派立組と二つに分かれ、それぞれ若者頭を中心に若者宿に集り虫祭り行事の秘策を練る。当日は朝早くから大太鼓の音が響き渡る。リヤカーに大虫を乗せて鉦、笛、太鼓に合わせ、獅子踊りなども繰り出す。若者たちによる大名行列は馬に乗った若者頭が殿様になる。